



## 福島原子力事故関連情報アーカイブ

FNA

Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	福島第一原発からの放射能と向き合う - 市民による放射能測定 11
Alternative_Title	Radioactivity measurement by the citizens 11 - To face the radioactivity from the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant
Author(s)	大沼 章子(名古屋大学) Onuma, Shoko(Nagoya Univ.)
Citation	第 60 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集, p.1A03-05-02 The 60th Annual Meeting on Radioisotopes and Radiation Researches
Subject	セッション：東京電力福島第一原子力発電所事故関連 2
Text Version	Publisher
URL	<a href="https://f-archive.jaea.go.jp/handle/faa/277756">https://f-archive.jaea.go.jp/handle/faa/277756</a>
Right	© 2023 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 60 回アイソトープ・放射線研究発表会要旨集」のデータであり、 発表内容に変更がある場合があります。



## 福島第一原発からの放射能と向き合うー市民による放射能測定 (XI)

Radioactivity Measurement by the Citizens (XI)

ーto Face the Radioactivity from the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant

名古屋大学大学院医学系研究科

○大沼章子(OHNUMA, Shoko)

## 1. はじめに

福島第一原発事故から12年が経過した。事故炉の燃料デブリの存在場所も未だ特定されず、廃炉作業も先の見えない状況が続いている。一方で、サイト内には処理しきれないトリチウム汚染水が溜り続け、漁業者や多くの市民が反対する海洋放出が今にも実施されようとしている状況下にある。事故時に環境中に放出された放射性物質については、半減期の短い核種は物理的に消滅し、現在は半減期の比較的長い核種、中でも25%しか物理的減衰が進んでいないセシウム-137が山野に多量に残留するため、環境・食品モニタリングの継続が必要なことなど、今も福島事故による放射能汚染問題は市民放射能測定所の存在の必要性を求めている。演者は「未来につなげる・東海ネット 市民放射能測定センター (C-ラボ)」および全国の市民放射能測定所のネットワーク「みんなのデータサイト (MDS)」に参加しているので、12年目の活動について報告する。

## 2. 各取り組みにおける放射能測定と結果

放射性セシウム測定：日立アロカメディカル社 CAN-OSP-NaI (2 in×2 in, 38 mm 鉛遮蔽体は廃鉛等で補強)、  
ミリオンテクノロジーズ社 ISOXSHLD (GR3021-7935-7FRDC, 25 mm および 50 mm 鉛シールド)

空間放射線量率測定：ALOKA 社 TCS-1172、日本遮蔽技研製 GPS 付きホットスポットファインダー-HSF-1

## 1) 依頼検査：被災地支援等は無料で実施

## 2) サイエンスカフェ・なごや環境大学共育講座等をリアル&amp;リモートで開催して放射能学習・情報共有

## 3) 市場調査：食品の測定での検出事例は、米麦豆類・果実類・山野草・キノコ・野生鳥獣肉等に絞られてきた。

2022年春のMDS「タケノコ・山菜測定PJ」は放射能汚染地に指定された17都県(コシアブラのみ全国)を対象とし、総検体数は248件で、検体採取は通販36%、店舗31%、縁故33%であった。うち、タケノコは12県産122件で、最大値78 Bq/kg(栃木県大田原市産)、中央値2.4 Bq/kg、食品基準超過は見られなかった。山菜は17都県産26種126件で、最大値は740 Bq/kg(栃木県那須塩原市産コシアブラ)、中央値は検出下限値未満、基準超過はコシアブラ5件(栃木県産4・山形県産1)、タラノメ1件(栃木県産)、コゴミ1件(群馬県産)で超過率は6%(7/126)であった。基準超過の栃木県産は全て出荷制限ありの地域のもので、うちコシアブラ3件は縁故による汚染状況の確認と考えられる非流通品であった。その他の超過品は、出荷制限ありの地域からの通販2件および出荷制限のない地域からの通販1件と店舗1件で、出荷制限の有無にかかわらず流通品であり、行政対応を求めた。26種の山菜のうち27%(34/126)はコシアブラであったが、基準超過品のコシアブラ比率は71%(5/7)と高く、山菜の中でも特に汚染しやすい品目であることが明らかであった。あく抜き用の灰(3件)や米糠(5件)も測定したところ、群馬県産の灰2件で基準値超過が見られた。それらの製造過程における濃縮の結果ではあるが、使用については注意喚起が必要と判断された。本調査の最大値740 Bq/kgのコシアブラ100gの一回摂取で0.00096 mSvの内部被ばく線量である。厚労省の委託調査(2022年2月~3月)による人が1年間に受ける放射線量、年間0.0005~0.0008 mSvを超えてしまうことになる。合わせて、注意を喚起したい。

## 4) 東北支援(援農と放射能測定)

毎年6月に福島県郡山市の有機農業家内で実施してきた。結果、屋敷内の空間放射線量率は物理的減衰と2015年秋の除染によって全体には低減していたが、引き続き身近な生活場のホットスポットの残留性を確認した。

## 3. 避難者訴訟支援(土壌放射性セシウム測定と空間放射線量率測定)

福島県から東海地区に避難した方々の避難元現況調査や裁判の傍聴活動を継続。「100 mSv未滿に発がんはないことが国際的合意」という被告(国・東電)側弁護士の主張に、改めてLNTモデルの重要性を確認した。

5. 最後に 山野の放射能汚染は今なお続いている。雨水が集まりやすいところには必ずホットスポットが存在する。無用な被ばくを避けるためにも、きめ細かな測定と対応が必要と考えられた。限定的な傾向にある公的機関の測定では知ることの出来ない身近な食品・環境の汚染について情報提供していくことの重要性を実感することが多くなってきた。専門家との協働も含めて、食品を含む環境モニタリング情報の提供に努めたい。

\*Nagoya University Graduate School of Medicine